

大学出版 '98 春

No.37



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



大学出版
37号

Spring · 1998

読書の周辺 ドイツ総選挙を見る視点	坪郷 實	1
読書の周辺 フラレーン—その途方もない着想と発見	篠原 久典	6
東南アジアの大学出版部(下) —— 開発をになうその学術出版	箕輪 成男	11
東京国際ブックフェア'98	秋田 公士	16
第19回(一九九七年度)日本生命財団出版助成図書		17
第四回 I P A 国際著作権シンポジウム	植村 八潮	18
大学出版部ニュース		19
新刊案内'98・1〜'98・3		27

表紙イラスト ヨースト・アマン『職人図鑑』より

大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛

(書籍の価格は本体価格で表示)

ドイツ総選挙を見る視点

坪郷 實

今年の九月二十七日に、ドイツにおいて統一後三回目の総選挙が実施される。この選挙のなりゆきが、ヨーロッパ内外で注目されている。というのは、最近ヨーロッパで政権交代が相次ぎ、いわゆる社会民主主義政党が好調であるからである。本稿では、まず、ヨーロッパ各国の動きを簡単に見て、次にドイツの総選挙を見る視点をまとめてみたい。

相次ぐ政権交代

ヨーロッパでは、この二年間に政権交代が相次いだ。

第一に、イタリアの一九九六年四月総選挙で、プロローディ率いる「オリーブの木」という中道左派連合が、中道右派連合に対して、初めて勝利を収めた。周知のように、中道左派連合の中心の左翼民主党は旧共産党が根本的に自己刷新した結果生まれた政党である。

第二に、一九九七年五月のイギリス総選挙でも若い党首ブレアの率いるニュー・レーバー（労働党）は、地滑り的な勝利をし、一八年振りの政権交代を果たした。労働党は、これまで四度、総選挙に敗北したが、八〇年代後半からの

キノック、スミス、ブレアという三代の党首による党改革の結果として、政権に復帰したのである。

第三に、フランスでも一九九七年六月の国民議会選挙で社会党政府が成立した。この選挙では、野党の社会党が予想外に保守のシラク大統領への批判票を集め、左翼陣営が票を伸ばしたのである。したがって、大統領が保守、首相が社会党という史上三度目の保革共存政権が登場した。

政権交代の意味するものは

さて、ある論者は、ヨーロッパにおいて「社会民主主義の世紀の終焉」を主張してきたが、これに対して、以上のような動きを、新しい社会民主主義の再興とみることができるのだろうか。確かに、これまでの新保守主義に対する新しい選択肢の登場を示唆しているようである。さらに、これに続いて、ドイツでも政権交代が起こり、社会民主主義政権が成立するのではという期待が高まっている。

しかし、各国の政党の動向を検討してみると、事情はそう簡単ではない。例えば、イギリスのニューレーバーのプ

レアは、「市場とコミュニティの価値の両立」、「みんなが果実を分け合う市場経済」を唱えている。また、イタリアの「オリーブの木」のプルーディ首相が「競争のルールを設定する『軽い国家』」を主張し、イタリア左翼民主党のダレーマが「自由主義革命」を掲げている。いずれにせよ、イギリスやイタリアの政権交代は、労働党や左翼民主党が根本的な自己刷新を積み重ねるなかで実現したのである。

このように、今は、「市場重視か、政府重視か」、「大きな政府か、小さな政府か」などの二者択一の対立ではない。むしろ、政府セクター・市場セクター・市民セクター（民間非営利組織NPO）三者のそれぞれの最適ミックスを目指す、さらに個人の選択を重視する社会構想が求められている。しかも、これは、具体的な政策や制度を実現するプロセスの中で姿を現していくものである。このような政策や制度の具体例として、日本では、地方分権、介護保険制度、NPO法などが、日程に上っている。

ヨーロッパにおける政権交代をこのように捉えるならば、政権獲得を期待されているドイツ社会民主党も同様な自己刷新の途上にあるのかが問われねばならない。次に、この点も含めて、注目されているドイツ総選挙をウォッチングするための基礎的な情報やデータをいくつか紹介しよう。

ドイツの選挙制度の特徴

ドイツの選挙制度は、日本で誤解されているように比例代表制と小選挙区制の「併用制」ではない。議席配分は、

比例代表制による政党への投票によって行われるので、ドイツの制度は、比例代表制である。ただし、比例代表制で議席の配分を受けるためには、政党は少なくとも全国で5%の得票を得るか、三つの小選挙区で議席を獲得しなければならぬ。これを、5%阻止条項という。

日本の衆議院にあたるドイツ連邦議会は、四年の任期であり、ほぼ任期満了の選挙が普通である。これは、解散権が規定されていないなどの事情もある。そのため、政府は四年間で実績を上げることが、野党はこの四年の間に次の選挙において政権を獲得するための戦略を練ることを目指す。ただし、この四年間は、むしろ短く、最近の政治家は目先の票のことばかり考えて、長期的視野で政策づくりをしないという批判もある。

選挙キャンペーンは、選挙直前の八週間に集中するが、前の「選挙当日の夜」に、次の選挙の選挙戦が始まると言われている。今回、野党の社会民主党は、昨年の九月からインターネットのホームページなどで、「選挙まであと何日」というカウント・ダウンを始めた。このように各政党はホームページを開いているので、日本からも、インターネットを通じて、簡単に選挙情報が入手できる。

さらに、選挙権及び被選挙権の年齢は、一八歳からである。この点、日本は世界の動きから遅れをとっている。むしろ、ドイツでは、この年齢をさらに一六歳に引き下げるべきではないかという議論が出ている。

大政党の衰退

次に、ドイツの政党の特徴を簡単に見ておこう。一九八三年選挙で緑の党が議席を獲得するまで、ドイツでは二つの大政党と一つの小政党という三つの政党しか連邦議会で議席がなかった。これを三政党システムと呼んでいたが、緑の党の登場により、四政党システムと呼ばれている。しかし、ドイツ統一後、一九九四年選挙では、旧東の地域で民主社会主義党が四つの小選挙区で議席を獲得したため、現在は、連邦議会には五つの政党が議席を持っている。

現在の政権政党は、コール首相の率いるキリスト教民主同盟・社会同盟(CDU・CSU)と自由民主党(FDP)である。CDU・CSUは、保守政党と呼ばれるが、中道右派と保守勢力の政党であり、農業地域でカトリックの比率の高いところで支持率が高く、自営業、企業家層、カトリックの勤労者層を支持基盤とする。FDPはリベラル政党で、非カトリックの自営業層の支持が厚い。

野党第一党の社会民主党(SPD)は、労働組合に組織された産業労働者層を支持基盤とし、プロテスタント系市民層や改革指向の新中間層からも支持されている。他方、九〇年同盟・緑の党は、非カトリックのホワイトカラー層の支持が厚く、四〇歳代以下の年齢層に重点がある。さらに、社会主義統一党の後継政党である民主社会主義党(PDS)は、旧東ドイツに基盤が限定されており、統一によるマイナスの影響を受けたものの批判票を集めている。

ドイツでは、有権者は政党に対して、明確な党イメージを持っている。CDU・CSUは、経済運営に優れているのに対して、SPDは社会的公正を実現する政党である。FDPは、かつて軍縮の党として知られていたが、脱冷戦で党アイデンティティを失い、次の総選挙でも生き残りがかかっている。さらに、九〇年同盟・緑の党は、環境保護に能力を発揮する政党である。PDSは、当面、旧東ドイツの地域政党としてのアイデンティティを獲得している。

次に、注目すべき点は、CDU・CSUとSPDの二大政党が一九八〇年代以後、衰退傾向にあることである。ウィーゼンダール(E. Wieselndahl, *Wie geht es weiter mit den Grobparteien in Deutschland? in: Aus Politik und Zeitgeschichte*, B1-2/1998, S.21.)によれば、緑の党の登場以後、二大政党の得票率は減少しつづけ、同時に投票率も後退している。このように、ドイツでも、政党不信や棄権者の増加が問題となっている。つまり、連邦議会と州議会選挙における二大政党の平均得票率は、一九八〇年の八七・四から一九九七年の七三・三%へ一四%も低下し、投票率も一九八〇年の八八・六%から一九九七年の六八・六%へ減少した。さらに、二大政党は一九七〇年代にあわせて、黨員約二〇〇万人にのぼる国民政党に成長したが、その後黨員を大幅に減少させている。一九八〇年を一〇〇%とすれば、一九九七年は八四・四%である。したがって、黨員も高齢化し、青年黨員は半減し、大政党の硬化現象が

進行している。

世論調査の動向と争点

さて、一番注目されているのは、次の総選挙での政権交代の可能性である。世論調査(表)を見てみると、昨年の後半は、SPDが第一党であり、現政権与党は少数派である。選挙八ヶ月前の時点で、SPDは第一党を確保している。もし赤(SPD)と緑(緑の党)の連立が成立すれば、政権交代が可能である。しかし、今の時点でこの傾向が選挙まで続くかどうかは不確実である。

特に、前回の選挙においても、選挙一年前にはSPDが優勢であったが、選挙の半年前から傾向は逆転し、結局選挙では敗北に到った。この選挙の年にタイミングよく経済が回復したことも、SPDには不利に働いた。

ところで、ドイツが直面している大きな問題は、周知のよ

うに、旧東ドイツの再建問題である。東西ドイツの実質的統一には、さらに一五年ないし二〇年かかると思われる。

この点とも関係して、四八二万人(一月失業率一二・六%)に達した失業問題が選挙の大きな争点となるであろう。さらに、税制改革問題、年金改革問題、そして統一通貨ユーロの導入問題も争点になろう。

首相候補は誰か

さらに、比例代表選挙で行われるドイツの選挙では、首相候補が誰であるかが決定的に重要である。しかも、情報化社会の進展の中で、魅力的な首相候補が必要とされている。ところが、現与党は昨年春に早々とコールを引き続き首相候補にすることを決定したのに対して、SPDはまだ首相候補を決定していない。

これにはいくつかの理由がある。まず、一九九〇年の統一選挙の首相候補ラフォンテーヌ、一九九四年選挙の首相候補シャルピングが共に、コールに手痛い敗北を喫した。このことから、SPDは、首相候補を早く決めて、最適の候補を擁立できなくなることを恐れている。

次に、SPDの党の内外で有力な首相候補と目されているのは、ニーダーザクセン州の州首相であるシュレーダーである。しかも、彼は、「ドイツのブレア」を目指してSPDの新しい路線を提案している。シュレーダーは、企業家と接触し、彼らとの信頼関係を作り、青年層と積極的に交流するなど、新しいSPDのイメージを獲得しようとして

政党支持率 (次の日曜日に総選挙が実施された場合)(%)

政党	1994		1997			1998
	10月選挙	6月	8月	10月	12月	1月
CDU・CSU	41.4	36	36	38	36	36
FDP	6.9	5	6	5	6	6
SPD	36.4	39	38	39	39	39
90年同盟 ・緑の党	7.3	10	10	10	10	9
PDS	4.4	5	5	4	5	4

(出所: Der Spiegel, Nr. 27, 35, 44, 52/1997, Nr. 5/1998)

みている。

しかし、彼は、今年の三月初めに州議会選挙を戦うので、その時に、得票率が前回を二%以上上回った場合にのみ、首相候補になることを明言している。現在党首は、ザールラント州の州首相であるラフオンテーヌであるので、彼も首相候補の有力な一人である。したがって、昨年秋の時点での党の宣伝ポスターには、ラフオンテーヌとシュレーダー二人が並んでいる。

SPDは勝てるか

このようなSPDの動きは、政権獲得のための慎重な戦略なのであろうか。実際のところ、首相候補が誰かによって、政府綱領の重点は変わってくるし、連立政権の構想にも影響がある。この点から、SPDは現政権に対する明確な選択肢を出していないという印象を受ける。

有権者が、一六日目と長期化する現コール政権に飽きかきていることは確かである。世論調査でも、次の選挙での政権交代への一般的期待は高い。しかし、望ましい連立方式については、意見が分かれている。一月の世論調査(デア・シュピーゲル誌)では、現政権三四%(一二月三〇%)、CDU・CSUとSPDの大連立二八%(三三%)、赤と緑の連立二四%(三〇%)と、政党支持とはズレている。

SPDは、現在連立相手を明示していないが、このような状況下では、首相候補を決めると共に、連立相手を緑の党と明示することによって、今後の選挙戦のイニシアチブ

を握れるのではないだろうか。

こうしたSPDをめぐる一連の問題は、イギリス労働党がやったような党首三代にわたって党改革を成し遂げるといような長期戦略を欠いているからである。ある党関係者は、SPDには、目立つ仕事をしたがる政治家はいないが、長期戦略に基づき党改革を実行する政治家はいないと述べている。この点が、SPDが有利な情勢であるにもかかわらず、今の時点で、政権交代を見通せない最大の理由であらう。

キーワードは「革新」?

ところで、SPDが昨年一二月に、CDUがこの一月に党大会を相次いで開催した。選挙準備の一環でもあるこれらの大会でのキーワードは、共に「イノベーション(革新)」であった。デア・シュピーゲル誌(一九九八年第五号)によれば、SPDは、党大会で「革新と公正」を掲げ、「経済・国家・社会の革新が新しい職場の創出のカギである」と主張する。他方、CDU党大会は、「革新、われわれは二一世紀を人間的なものにする」を掲げ、コール首相は「革新が将来のカギであり、職場への王道である」と述べる。さらに、九〇年同盟・緑の党のレーステルは、「エコロジー的経済的革新戦略」を主張する。

果たして、誰の主張するどのような革新が、未来を切り開くのであろうか。九月の総選挙に期待しよう。

(早稲田大学教授)

フラーレン——その途方もない着想と発見

篠原久典

「神が私に分子を作れとおっしゃったら、それはどんな分子だろうか？」

オーヴェイル・チャップマン

自然科学においては、けた外れの発見がなされると、科学者達は自分たちの自己満足に衝撃をうけ、まだまだ自然を十分に理解しているわけではないことに気づく。このよ
うな大発見は一世紀の間に何回も起こることではないが、
二十世紀も最後の十年を残すだけとなった一九九〇年に、
物質科学の分野で、文字どおり新物質についての世紀の大
発見があった。それは、今世紀中にはもう新しい物質の発
見など出ないだろうと多くの科学者が思っていた、その矢
先のことであった。しかも興味深いことにこの新物質は、
あの薄汚い、誰からも嫌われる真っ黒い煤（すす）の中か
ら発見された。そしてこの新物質は、人類にとってもっと
も馴染みの深い元素である「炭素」の新物質であった。

◇ ◇ ◇

炭素原子が六十個集まってできた、まったく新しいタイプの炭素分子が多量に合成されたのである。この新炭素物質は、なんの変哲もない黒い煤に混じっているところをドイツとアメリカの科学者達によって発見された。
しかもこれを発見した科学者達もこの炭素物質を合成しようとしていた訳ではなく、偶然にこれを発見してしまっ
た。彼らは、宇宙空間に存在する炭素微粒子

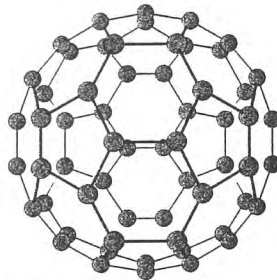


図 サッカーボールとC₆₀の分子構造。C₆₀分子は、このボールの60個の頂点を炭素原子で置き換えた形をしている。

を長い間研究していた宇宙物理学者であった。驚いたことにこの新種の炭素分子（化学記号ではC 60と書かれる）は、白い六角形と黒い五角形の模様で有名なサッカーボールとまったく同じ構造をもっていることがわかった（図参照）。このためこの新規の炭素分子は「サッカーボール型分子」とも呼ばれている。

現在では、炭素原子が六十個集まったC 60だけでなく、炭素原子が七十、八十、九十、百と集合したC 70、C 80、C 90、C 100などの一連の球状炭素分子の存在も知られている。C 60、C 70、C 80、C 90、C 100……などの球状炭素物質を「フラーレン」(Fullerene)と総称している。

いったんC 60分子が発見されると、原子、分子あるいは物質をおもな研究対象とする化学者や物理学者だけでなく、宇宙物理学者、地球科学者や分子生物学者など多くの分野の科学者が競って関連の研究を開始した。事実、C 60が発見された一九九〇年九月（発見の第一報はイギリスの一流雑誌「ネイチャー」の速報に掲載された）から一九九七年の未までの七年間に世界中で発表されたC 60関連の論文数は、実に一万二千報を超えている。これは自然科学でもかつてないほどの科学者達の熱狂と興奮を示している。では、なぜこの物質がそれほどの大発見なのか？ なぜフラーレンは科学者達をそれほどまで熱狂させるのか？ パラドキシカルに聞こえるかも知れないが、それはわれわれにもっとも身近な物質である「炭素」のまったく新しい形だから

である。

◇ ◇ ◇
炭素原子は、この宇宙に最も豊富に存在している元素の一つである。もちろん地球上にも豊富に存在していて、われわれの身近なものは全て炭素からできているといってもよい。炭素が宇宙でどのように生成したか、あるいは、炭素がどのようなメカニズムで地球上に蓄積されてゆき、生命や生物の進化が可能となったかという疑問は、昔から数多くの科学者を虜にしてきた。そう、炭素は生命の源でもあるからだ。それでは、宇宙空間や地球上に存在する炭素は、どんな形で存在しているのだろうか？ 一般に炭素は二つの結晶形態（「同素体」とも呼ばれる）、グラファイト（黒鉛）とダイヤモンド、をもつことが知られている。グラファイトは鉛筆の芯はもとよりエレクトロニクスや工業製品など多方面で使われていて、人類の科学技術を支えている物質といっても良いだろう。また、ダイヤモンドは一般には宝石として有名だが、グラファイトと同様に各種の工業製品の重要な材料として利用されている。

一九九〇年までわれわれ人類は、炭素の同素体はグラファイトとダイヤモンドだけであると思っていたし、これ以外の炭素の結晶形があるとは予想もしていなかった。しかし、突然のフラーレンの発見によって、炭素の化学、物理、材料科学を扱った無数の百科事典や高校、大学の教科書は文字どおり一晩にして時代遅れになってしまった。今や、炭

素の形態はグラファイトとダイヤモンドの二つだけでなく、フラーレンを加えた三つになった。

◇ ◇ ◇

サッカーボール分子C60を初めとするフラーレンの発見は、一見、炭素の新物質とは関係のないような天文学、宇宙物理学の分野から始まった。リチャード・スモーレー（ライス大学）とハロルド・クロトー（サセックス大学）の共同研究グループは、未知の星間分子（星と星との間に観測される分子）の存在やその性質に興味をもっていた。彼らは特に、宇宙空間における長い直線状の炭素分子の生成メカニズムに興味をもっていて、実験室でこのような炭素分子を作りだそうと「レーザー蒸発クラスタ分子線」という非常に精密な装置を用いて実験を行った。その結果、予想に反して思いがけずC60を偶然に実験的に発見した。これはC60の発見にまつわる、第一のセレンディピティー（偶然の発見）となった。

この発見は、非常に奇抜で魅力的だったので、発見当時（一九八五年）、このスモーレーとクロトーらのC60サッカーボール型分子は大変な話題となった。しかし、残念なことに、グラファイト棒のレーザー蒸発による方法で生成されたC60の量は極く微量だったので、正確な構造解析ができなかった。実際に、C60がサッカーボール型構造をもっていることが実験的に解明されるまでに、五年の歳月が必要であった。

フラーレンの発見についての第二のセレンディピティーは一九九〇年に起こった。C60の研究熱も一段落した一九九〇年九月、ウォルフガング・クレッチマー（マックス・プランク研究所）とドナルド・ハフマン（アリゾナ大学）らは共同で、グラファイトのヘリウムガス中での抵抗加熱という実験方法で生成する炭素の煤の中には、C60が多量に存在することを発見した。

宇宙空間、特に星間には、決まってある異常なパターンの吸収スペクトルおよび発光スペクトルが観測されていた。このスペクトルの原因はなかなか説明がつかず、科学者が長い間悩ませてきた。時がたつうちに、このスペクトルは宇宙空間に存在するある種の炭素物質が関係しているのではないかと考える科学者が出てきた。ただ、この炭素は、スペクトルの形から地球上に存在しているグラファイトやダイヤモンドではないことが解っていた。クレッチマーとハフマンらは、この天文学上の大問題を解こうとして、思いがけずC60の多量合成法を発見してしまった。

クレッチマーとハフマンの生成方法は、スモーレーらのレーザー蒸発法と比較して大変に簡単でしかも安価（！）な方法であった。ヘリウムガス雰囲気中で、グラファイトに高電流を通じて抵抗加熱を行いグラファイトを気化させて炭素の煤を生成すると、その煤の中には10%前後のC60が存在することを彼らは発見した。生成した煤の固まりは、グラファイトに似て不溶性であるが、C60はベンゼンやト

ルエンなどの有機溶媒に溶けるので容易に煤から抽出することができると。また、煤からはC 60以外にもC 70が抽出された。興味深いことに、この二人は、星間に存在するとされるグラファイトに似た煤のような物質を作りだそうとして、またもや、偶然にもC 60の新合成方法を発見したのである。この重要な発見が報告されると、世界中でC 60の研究が急激に活発になった。

C 60を初めとするフラレーンは一九九〇年以後の研究によって、超伝導体や半導体あるいは強磁性体(磁石)になることがわかった。また応用としてフラレーンは、リチウム二次イオン電池や光学素子に有用であることがわかってきた。また、フラレーンはH I Vエイズウイルスの酵素反応の阻害剤や、MRI(磁気共鳴診断)の造影剤としての医学方面への応用にも大きな期待がかかっている。さらに驚いたことに、C 60は六千五百万年前の恐竜絶滅時代の白亜紀/第三紀境界地層や、二億五千万年前の生物大絶滅時代のペルム紀/三疊紀境界地層などの自然界からも発見された。これら分野を超えた発見は、自然科学の多くの分野の科学者がフラレーン研究に夢中になっている証しである。

◇ ◇ ◇

フラレーンの発見を間近にみて、またフラレーンの研究者として私自身、自然科学における発見とはなんだろう、と思う。C 60とフラレーンの発見はいままで述べてきたように、大型予算をつぎ込んで行う最近流行のプロジェクト

研究とは正反対のところから生まれた。一九八五年のフラレーンの発見はアメリカとイギリスの科学者の共同研究とはいえ、少数(教授三人と大学院生二人)の研究の極めて個人的なレベルでの共同研究の結果であった。また一九九〇年のフラレーンの多量合成法の発見もドイツとアメリカの共同研究だが、少数(三人の研究者と一人のアルバイトの大学院生!)の研究者の個人的な共同研究で行われた。しかも二つの大発見ともセレンディピティーの産物であった。物質科学における世紀の大発見は、天文学と宇宙物理学の研究途上で起こった異色のセレンディピティーであった。フラレーンの発見に、失われつつある科学の発見物語をオーバーラップさせて、何かいいようなないロマンを感じるには私だけであろうか?

今や時代は、大グループによる大規模実験が主流である。ノーベル賞もアメリカのエリート大学で、恵まれた研究環境にいる飛びきり優秀な研究者が獲得することが多い。それはそれでいいと思う。しかし、私はこのような研究にロマンを全く感じない。このような研究に対しては、個人的には“So What”“どうしたい”。サイエンスの魅力はやはり、小グループの小規模実験によるブレイクスルーである。キューリー夫人のラジウムの発見がそうだった。ワトソンとクリックのDNAの発見も若い二人の独創力だった。そして、今まで述べてきたC 60・フラレーンの発見もまさにこの典型である。科学者個人の独創力と執念(と幸運)で行うこと

のできる大きなブレイクスルーが、二一世紀を目前にひかえた現在でも存在することを証明したのが、フラールレンの発見である。このような個人レベルでの発見ほど、科学者を奮い立たせ、研究に没頭させるものはない。科学者をつりこにするのは個人レベルでの疑問と発見である。

一九九〇年に起こったフラールレンの多量合成法のブレイクスルーを契機に、フラールレン科学は多くの自然科学の分野の研究者を虜にし始めた。これは、今まで別々に発展してきた化学、物理あるいは材料科学などの各分野が、C60を初めとするフラールレンを核として共通の話題を持ち始めたためである。現在、多くの科学者がそれぞれの専門分野を越えて、大きな情熱をもって、C60・フラールレンを語っている。フラールレン研究を行ってきて、私は、この分野を

越えた共通の話題性が何よりも素晴らしいと思う。

フラールレンの科学は、多量合成のブレイクスルーから八年目を迎えたが、基礎的な分野だけをとっても、まだまだ解明されていない多くの重要なテーマがある。また、フラールレンの応用研究はこれからの五年間が勝負の時であると思う。現代の科学の多くの分野が抱える、心が踊るような研究テーマの欠如という深刻な問題からは、C60・フラールレンの科学は無縁である。まだまだサイエンスを楽しめるだろう。

しかし、この先もつと驚くべき発見が起こることを期待したい。一夜にして教科書が時代遅れになるような。

(名古屋大学大学院理学研究科教授)

東南アジアの大学出版部(下)

開発をになつその学術出版

箕輪 成男

マレーシア

大学教科書 広義の学術書の中で大学教科書は、マレーシアにとって緊急性をもっている。デワン・バハサを中心に国内原稿によるもの九八二点、翻訳によるもの三〇四点、計一二八六点の大学教科書が一九九〇年五月までに出版されたが教科書の不足はまだ深刻であり、往々にして英文の書籍を使わざるを得ない。英文の大学教科書は英米の教科書のリプリント版で、マレーシアで印刷されるものもあるが、香港・シンガポール製を輸入したものが圧倒的に多い。マレーシア国内で出版されるリプリント版大学教科書の最大の出版社は、オックスフォード大学出版局マレーシア支社で、一社で年間三〇〇点以上を出版、推定二〇〇〇万リンギ(一〇億円)を売っている。大学教科書全体としては、国語によるもの四五万冊、英語リプリント六〇万冊、計一〇五万冊、三一五〇万リンギ(二七億円)の大きな市場を形成していることになる。教科書は一冊平均三〇〇リンギ(一五〇〇円)もする。これは所得から言って日本の学生が教科書を一冊一万五千円支払って買うのに相当する。

学術書 マレーシアの学術書出版社の数は極めて少ない。七つの大学出版部とMARRA技術大学、四つの研究所、それにデワン・バハサの一三の学術出版社が、マレーシア学術出版委員会(PEPET)を結成して情報交換、協力活動を行っており、これらが主たる学術出版機関と見てよい。一九九二年八月に、国民大学出版部によって準備された基本資料によると、一九九〇年にマレーシアで出版された学術書(大学テキストをふくむ)は次の通りである。

大学出版部	一一〇点
デワン・バハサ	一二五点
一般出版社	一〇点
学協会	一〇点
学術雑誌	七五点(延号数)
大学教員の自己出版	一〇点
合計	四五〇点

このうちデワン・バハサの二二五点は、すべて国語による大学教科書の出版であり、雑誌は書籍と切り離して扱うとすれば、大学教科書を除く学術書は一五〇点となる。これ

らの学術書はマレー語と英語で出版されているが、政策的にはマレー語出版に重点があり、マレー語による参考文献の充実が意図されている。一例として国民大学出版部の場合、年間出版点数は二〇点ほどで、重版が五点くらい出版される年もある。平均印刷部数は五〇〇〜二〇〇〇部で、定価は平均二五リンギである。このほかに雑誌を年に延べ二〇点発行している。一九九〇年における学術出版社の規模を示す職員数はつぎの通りである。

デワン・パハサ	二二六三人
国民大学出版部	一一一人
マラヤ大学出版部	二七一人
科学大学出版部	七人
農業大学出版部	六人
技術大学出版部	四人
M A R A 技術大学	一八人
学術出版委員会	五人
計	三四一人

学術書の発行部数は少ないから売上総額は二七五万リンギ（約一・五億円）にすぎず、経済的には大きな影響力を持っていない。

大学出版部 マレーシアを代表するマラヤ大学の出版部は、この若い国では最も古い歴史をもつ大学出版部である。一

九五四年から一九六九年まではオックスフォード大学出版部のマレー支局の協力の下に編集・製作・販売を行っていたもので、一九七四年には完全独立して機能しはじめた。

永い間、学長として君臨したウンク・アジズ先生は知道家として有名だが、大変多才な人で出版部に大変深い関心をもち、大いに力を尽くされた。先生の直接支配のおかげで出版部の発展があったと同時に、フィリピンのところで書いたように、出版部におけるプロ意識の成立を阻害した面もあったのではないかと思う。現在の部長イシヤク氏は本来学者であったが、いまだでは出版部長に徹している。ただしメディア学科の講師を兼ねている。

マラヤ大学出版部は一九九六年に重版をふくめて二二点出版し、その半数以上が新刊である。二六人の職員のうち編集は四人で残りは印刷・製本・製版・植字・販売等で、半分は制作関係という。ここでも出版部は印刷所を持ち、その手間賃稼ぎの利益が出版に使われている。この出版部は多年独立採算でやってきたが、過去二年はじめて大学から、九・六万リンギ、一六万リンギをそれぞれ補助金として受け取った。この出版部もまた全学へのサービス機関として、全学問分野の本を出し、小説まで出して総合出版社の形になっている。大学教科書は国語のものはデワン・パハサが出し、英文のリプリントはオックスフォードなどが出し、あとは輸入の廉価版であるので、当出版部としては出版していない。参考書、とくに書誌が多く、刊行書のほ

とんが英語で出版されている。出版部数は五〇〇ないし一〇〇〇部で、メーリングリストによりDM宣伝で売る。アメリカ市場に対してはハワイ大学出版部が販売代理店をつとめている。英文の雑誌も出しているが、売れるのはアジア諸国のみである。これまでのベストセラーは刑事法律書で、警察や軍隊にまで売れたから四〇五〇〇〇部も出た。停年後もマレーシアに留るイギリス人がフリーランスの編集をやってくれるので、編集の質は高い。

一方年に三〇四〇点の新重版をほとんど九五%まで国語で出版しているマレーシア国民大学の出版部は、年に三六万リングの財政補助を受けている。国語出版に対する政府の積極推進姿勢から、継続的に与えられてきたこの補助金によって国民大学出版部は投下資金の回収をあまり気にせ



マレーシア国民大学出版部長ハスロム・ハロン氏。出版部はこの建物の2階にある。

ずに次々と出版できたらしい。ここには印刷所はなく、出版活動だけで一〇人ほどの職員構成である。

マレーシアの大学出版部としては以上二出版部のほか、活発な順に技術大学出版部、農業大学出版部、科学大学出版部があり、いずれも年間一〇点以上を出版している。そのほかにクタの北部大学、イスラム大学の出版部があり、以上七大学出版部でマレーシア大学出版部協会を作っている（正式名称は英語でMalaysian Council of University Publisher、略称MABIM）。マレーシアの大学出版部は全般的に質の高い仕事をまじめに行っており、社会的に尊敬されている。国民大学出版部長のハスロム・ハロン氏がマレーシア書籍出版協会の会長に選ばれているのは、その現れといえるだろう。

インドネシア

大学教科書 インドネシアの広義の学術出版には大学教科書、ビジネス専門書、コンピュータ本、それに狭義の研究発表としてのモノグラフという四つの領域がある。このうちビジネス書、コンピュータ本はいずれも概論概説や入門書、手引書で、教科書に他ならない。

インドネシアの出版活動は極端に学校教科書に偏っている。全出版生産量の四分の三（七四%）が学校教科書である。残りの四分の一の中で、また相当部分が大学教科書であって、一般的な読書のための出版が極めて限られている

ことを示している。インドネシアの人々にとってリテラシーよりもオーラリティ（口頭の伝達）の方にコミュニケーションの重点があるやに見える。そうした全般的状況の中で、大学教科書は多くの出版社によって手がけられている。例えばインドネシア書籍出版協会長のウスマン氏の所有するロスダ出版社は一九九五年に教育分野で一〇点、コミュニケーション分野で四点の大学教科書を出版し、一定の専門領域への特化を示している。ロスダ社はこれらの教科書を二五〇〇ないし五〇〇〇冊出版し、定価は頁当たり二円（四〇ルピア）だが、所得対比では頁五〇〇円に相当するから大変高い。

コンピュータ本の翻訳出版で急速に発展したのは、デイトナスチンド出版社である。創業一〇年にすぎないがコンピュータ本三五〇点、ビジネス、経営書五〇点の既刊本をもち、現在のペースは新重版ふくめて月に一〇点、年に一〇〇〇〜一二〇〇点を予定している。一点三〇〇〇〜五〇〇〇部を販売するのに一年かかる。社員三六人の半分一八人はマーケティング関係である。ビジネス・経営書がブームを呼んでいるのは、いうまでもなくインドネシア経済の発展を反映するもので、その多くはアメリカ本の翻訳である。

学術書 大学レベルの教育を急激に大拡張したものの若い国インドネシアにとって、研究レベルでの蓄積はまだこれからである。筆者が行った最近の調査で、アンケートに答

えた一三八社のうち、学術書を主体とするものが二四社あり、その他の出版社もふくめて学術書新刊点数は五三三点であった。しかしそのほとんどが大学教科書やコンピュータ本、ビジネス経営書で、狭義の学術書は極く少数に留まるものと推定される。一次情報的な研究発表はほとんどが学術雑誌に発表され、少数のシンポジウムのプロシーディングスなどを除き書籍の形となることはないのである。

インドネシアの学術出版機関としてユニークな存在にLP3ESがある。この名称は経済の三つのP（インドネシア語で研究・教育・情報の頭文字がいずれもP）のための協会、すなわち社会・経済問題に関する研究・教育・情報センターを意味している。一九七一年に設立されたこの協会は研究・教育から図書館サービスまで、手びろい活動を展開しているが、その重要な任務のひとつが出版である。LP3ESはインドネシアにおける社会科学の学術書、平易な専門書、大学教科書のパイオニア的出版社として評価されている。オリジナルのほか翻訳書も出している。

LP3ESはまた権威ある雑誌「Prisma」（月刊インドネシア語誌および季刊英語誌）を出版している。本誌はインドネシアの開発問題に関する知的フォーラムを提供している。出版部門のスタッフは二〇人ないし二五人ほどで、これまで二〇年間に約二〇〇点出版してきた。LP3ESの事業資金は国際財団の援助、政府補助金および事業収入でまかなっている。過去五年テレビの影響で販売部数が減

少している。インドネシア国民は読書習慣に乏しく、オール/ビジュアルな情報を好むようで、八〇年代半ばまでは五〇〇〇部以上刷っていたが、今では一五〇〇〇〜三〇〇〇部しか刷れない。それでも多年培ってきた信頼のおかげで、固定読者が多く、七〇〇部はスタンディングオーダーで出ていくという。

大学出版部 インドネシアには六つの大学出版部がある。いずれも歴史が新しい中で、最も早く設立されたのが一九六九年のインドネシア大学出版部であり、その他の五出版部はいずれも一九七一年末に活動を開始している。ハサスディン大学、セマラン教育大学、バンドン工科大学、エアランガ大学、それにガジャ・マダ大学の出版部である。これら五大学出版部はいずれもオランダ政府の援助によって設立され、インドネシア大学出版部はフォード財団寄贈の建物と印刷機によって活動を開始したのである。筆者が訪問した一九七四年には、インドネシア大学出版部には新式の印刷機が、電気の供給がないため未使用のまま放置されていたが、いまではフル稼働でその収益が出版部の財源となっている。出版部の職員は五〇人（印刷二五人、出版二五人）、職員は多すぎるが政府の雇用政策で雇わされており、製本の単純作業さえ機械化出来ない。九五五年の新刊点数は三六点、重版五〇点、大学教科書が多く単行本もある。二〇〇〇部を印刷し二年で売切るのが目標。出版部は独立



インドネシア大学出版部の部長室で。右から2人目がレゴオ部長。

採算で運営され、大学からの援助はとくにはない。雑誌は二年前に手がけたが資金不足で現在はストップしている。印刷、出版からの粗利益年間六千万ルピアが予算規模で、これで職員の人件費、事務所の経費、運営費を支出している。出版部長のレゴオ氏は経済学部教授（統計学）である。

以上見てきた三つの国の大学出版部はいずれも歴史が浅く業績も限られているが、未来への展望は明るいものがある。何と言っても目標が明確だ。昨秋以来の経済危機で各国とも環境は厳しいが、その真摯な努力は必ずや解決の途を切拓くだらう。二一世紀の大学出版部活動の力強い突破口が、これら東南アジア諸国の大学出版部によって切拓かれるようにおもわれてならない。

（神奈川大学教授・大学出版部協会顧問）

東京国際ブックフェア'98

秋田 公士

東京国際ブックフェア'98が、本年一月二三日(木)から二五日(日)までの四日間にわたって、昨年同様有明の国際展示場「東京ビッグサイト」で開催された。

大学出版部協会は、これも昨年同様、七つに区分された専門分野の中で、「人文・社会科学書フェア」にブースを

設け、全三三大学出版部の刊行図書の中から、八〇四点を展示・販売した。



東京国際ブックフェア'98/協会ブース

今回の出展社総数は四〇か国・地域からの全四五〇社に及んだ。年に一度の出版界最大のイベントの名に恥じない規模といえるだろう。それだけに、決して大所帯とはいえないがたい大学出版部協会にとっては、参加するこ

と自体容易なことではない。とりわけ、実務を担当された営業部会諸氏の苦労は大変なものがあつたことだろう。まず、そのことに對して感謝の意を表したい。

協会ブースの入場者は、総計三九五七人を数えた。これも、決して小さな数字ではない。協会のブースを目的に來場した人もあるだろうが、今回初めて、大学出版部協会の存在、各出版部の存在を知った人も多いだろう。その意義は、書籍の売上金額だけでは計れないものがある。

しかし同時に、「ブックフェアとは何だろう」という疑問も湧いてきた。編集部会長としての公式見解ではないことを明記した上で、個人的な感想を記してみたい。

ブックフェアの來場者は、何を目的に足を運んだのだろうか。ふだん目にすることの少ない本を求めて? それも一つの目的ではあるだろう。しかし、あの広い会場の、一つひとつのブースを丹念に見てまわるのは相当に疲れる。フェアのために上京してきた人もあるだろうが、本を探すが、神田近辺の書店を歩きまわる方が楽だ。

いうまでもなく、フェア(Fair)は展示会であり見本市だが、お祭りであり、縁日でもある。いわゆる「ハレ」の

場として、日常的な書店探訪とは違うものを、入場者は求め、期待しているのではないだろうか。

同時に開催された各種のセミナー、サイン会、洋書のバーゲン、造本装幀コンクール展などには、そうした要素も含まれているが、協会としては参加していない。最近では協会加盟出版部の中にも、CD-ROMなどによる電子出版を手がけるところが増えてきたが、そのデモンストレーションがあるわけでもない。

思いつきにすぎないが、本は展示せず目録にとどめ、協会の意義や目的を訴えるパネル展示をすることも、一つの参加の仕方ではあるだろう。ブースに直角にパネルを並べれば、全加盟出版部の簡単な紹介も可能だ。入場者がパネルを見ている間は、エンドレステープで耳からもメッセージを送り込む。

現在、編集部会では協会のホームページを作成中だが、これが完成すれば、何台かのパソコンを置いて、入場者にアクセスしてもらおうというだろう。関心を持った人には、大学出版部の本はどうすれば検索できるのか、どんな購入方法があるかを記したリーフレットを渡せばよい。

本は中身が生命——「質の高い本を並べることこそ最高・最大の普及活動である」という考え方が間違っているとは思わないが、それだけではお祭りにはならない。書店型の展示とはひと味違う何かを来年以降のブックフェアには期待したい。

(法政大学出版局)

第19回(一九九七年度)日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成一〇年四月～平成一一年三月

- ① 日本北辺の探検と地図の歴史 北海道大学図書刊行会
秋月俊幸(元・北海道大学法学部助教)著
- ② 琉球列島有剣ハチ・アリ類検索図説 北海道大学図書刊行会
著者代表・山根正気(鹿児島大学理学部教授)
- ③ トドの回遊生態と保全 東海大学出版会
著者代表・大泰司紀之(北海道大学大学院獣医学研究科教授)
- ④ 東海沖の海底活断層 東京大学出版会
編者代表・徳山英一(東京大学海洋研究所助教)
- ⑤ 日本煉瓦史の研究 法政大学出版局
水野信太郎(金沢学院大学経営情報学部助教)著
- ⑥ 阪神・淡路大震災と子どもの心身 名古屋大学出版会
—災害・トラウマ・ストレス—
- ⑦ 身体運動における「右と左」 京都大学学術出版会
—筋出力における運動制御メカニズム—
小田伸午(京都大学総合人間学部助教)著
- ⑧ 近世の地方金融と社会構造 九州大学出版会
楠本美智子(九州大学大学院比較社会文化研究科助手)著
- ⑨ The Pathology of Minamata Disease 九州大学出版会
著者代表・武内忠男(国際地球環境大学教授・熊本大学名誉教授)

* 日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

第四回 I P A 国際著作権シンポジウム

国際出版連合（I P A）の第四回シンポジウムが、一月二二日（木）から二四日（土）までの三日間、東京国際ブックフェア会場に隣接する東京国際会議場で開催された。

ベルヌ条約百年を記念して始まったこの国際著作権シンポジウムは、今回初めてヨーロッパを離れアジアの会場で行われた。参加登録者は、出版者、著作者、法学者、図書館、関連団体の著作権担当者など国内一六二名、海外一四六名に加え、会議参加のみの聴講参加者五〇名であった。

初日は開会式に引き続き、斉藤博筑波大学教授（著作権法学会会長）およびウルフ・フォン・ホルシアス国際出版者著作権者協議会議長による基調講演が行われた。今回のテーマである「変化する市場における出版者」を受けて、デジタル化、ネットワーク化によって大きく出版環境が変わる中でも、出版者が文化の伝達者として創造的役割を發揮する必要性が強調された。さらに法的保護について議論を深めることが提案された。

八つのセッションは、それぞれ「出版者の権利ー出版者の創造的役割の法的位置付け」「電子的著作権管理システム（E C M S）」「ネットワークの価値革新」「パートナーとの提携と展望」「アジアの経験」「著作権管理システムに

よる国際的取引」「権利の執行」「決議・勧告」である。さらに会場では E C M S のデモンストレーション等が行われた。なかでもアメリカ出版協会が中心となって開発し、I P A も支持を表明している D O I（デジタル著作物識別システム）や、北川善太郎京都大学名誉教授が提唱する著作権のマーケットモデルであるコピーマートに関しては、講演で参加者の反応もよくデモも注目を集めた。

最終セッションでは次の四つの決議が採択された。

① 出版者の権利ならびにデータベースに対する排他的権利に関する決議 ② デジタル環境における著作権管理技術に

関する決議 ③ 著作権をめぐるパートナー間の協力に関する決議 ④ 著作権の遵守に関する決議

特に第一決議では、日本における著作者隣接権としての「出版者の権利」立法の推進を I P A として支持する表明があった。

（東京電機大学出版局・植村八潮）



三笠宮崇仁親王臨席の開会式

第21回 人文・社会科学系 '98 出版五団体合同新年会

主催 国語 国文学出版会 人文会 法経会 歴史書懇話会 大学出版部協会



'98 出版五団体合同新年会にて、前列中央に山下幹事長(右)と阿部副幹事長(左)

同、雄山閣出版・長坂
会長(左)と風間書房・
風間社長



▼東 晃著『雪と水の科学者・中谷宇吉郎』(四六判・二八〇〇円) 「雪は天から送られた手紙である」はあまりにも有名である。現象をよくみることに、そしてそれを実験室で再現すること、風土にあった研究をすれば必ず役に立つこと、これが中谷の研究者としての基本姿勢であった。雪結晶から霧退治さらに洪水調査まで、多彩な研究活動を繰り広げた宇吉郎の科学の方法と素顔を、長年彼に師事した著者が尊敬と追憶を込めて語る。関連書として小林楨作著『雪の結晶』(B5判・一五〇〇円)、前野紀一著『氷の科学』(四六判・一五〇〇円)がある。

▼ウォルラベン著、黒沢信道・優子訳『水鳥のための油汚染救護マニュアル』(B5判・一八〇〇円) 日本海沿岸のタンカー事故はまだ記憶に新しい。頻発する油汚染事故に出遭った水鳥を救護する方法を具体的かつ平易に解説。日本で初めて出版される関係者必携のフィールドマニュアル。日本の読者のため、巻末に訳者による付録を添付。八木健三著『北の自然を守る』(四六判・二〇〇〇円)も併せて読まれることをお勧めする。

▼永岡薫編著『イギリス・デモクラシーの擁護者 A・D・リンゼイ―その人と思想』(本体五二〇〇円)

リンゼイは、『民主主義の本質』で知られているが、オックスフォード大学の副学長もつとめた政治哲学者である。本書は、リンゼイのひととなりと彼の思想の全貌を多数の幅広い執筆者により紹介した我が国初の研究書である。

主な内容 リンゼイとキリスト教、リンゼイの人間観、リンゼイのデモクラシー論、リンゼイと大学改革、その他。

なお、本書は文部省科研費の補助を受けた。

▼三田村佳子著『川口鑄物の技術と伝承』(本体七六〇〇円)

埼玉県川口市は鑄物の町として知られるが、現在僅か数人の職人を残すのみとなった。著者は伝統的な鑄物の技術と伝承を民俗学の観点から、現地での調査をもとに、多数の資料や写真、聞き取りにより、彼らの生活や信仰をも含めまとめたものである。

なお本書は日本生命財団の出版助成を受けた。

慶應義塾大学出版会

…学術叢書の三点をご案内します。

▼〈慶應義塾大学産業研究所叢書〉

* 『先物・オプション市場の計量分析』(岩田暁一編、二四〇〇円) は、先物・オプション取引の理論的説明とともに、市場における取引主体の行動モデルを構築しマイクロデータと対決させる。またカオス理論の適用も試みる本格的計量経済学的研究を行った待望の書。

* 『実証経済分析の基礎』(中島隆信他編、三四〇〇円) は、社会の豊かさを測るための多様な分析手法を具体的経済資料を使い解説する。

▼〈慶應義塾大学地域研究センター叢書〉

* 『ハイブリッド・キャピタリズム—東アジアの「和魂洋才」型発展—』(藤森三男他著、二二〇〇円) は、東アジアの目覚ましい経済発展の理由を、ハイブリッド(=交配)をキーワードに説明する。…: ニュータイプの紀要をご案内します。

▼『KEIO SFC REVIEW』No.1 (慶應義塾大学湘南藤沢学会編、一四二九円) は、「デジタルユニバーシティからデジタル社会へ」という特集のもと、現状分析と近未来への展望を論じる。

産能大学出版部

▼『衝撃の古代出雲』(安本美典著、一八〇〇円)

神話の宝庫といわれる出雲。その出雲の神庭荒神谷遺跡から、三五八本もの大量の銅剣が出土し、さらに加茂岩倉遺跡から四九個もの大量の銅鐸が出現して、マスコミをにぎわした。しかし、その報道は、出土物の様式・遺構の状況などを詳しく説明しただけである。千数百年の昔に、いったい何があったのだろうか。

本書は、古代史研究で広く知られる著者が、鋭い視点で、その謎のベールをはぎ、真実に迫る。出土物や遺構は、古代史のどこに、どのような位置づけをすべきか、どんな時代だったのか、出雲神話との結びつきは、誰が、いつ、何のために使ったのか等…徹底追求した話題作。



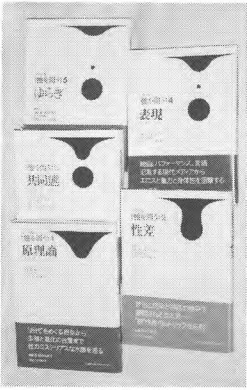
専修大学出版局

▼『石巻専修大学開放センター編』『学術とロマン』(一四〇〇円) 大学の先生方が、学問や科学技術の発展に傾けた情熱や思いを社会人講座向けに、よりわかりやすく書いたのが本書である。

▼専修大学今村法律研究室編『帝人事件』全12巻(各四一七五円) 戦前の政治的フレイムアップが垣間見える疑獄事件の鑑定書、尋問調書、検事調書、上申書などの根本史料集。今秋にでる別巻で完結。

▼『シリーズ性を問う』全5巻完結!

(大庭健他編、各巻二八〇〇円) 本シリーズは、現在話題になっている性について、生物学・社会学・哲学といった各分野にわたって網羅し、性をトータルに理解することを目的としている。本シリーズが性の新たな認識の起点になればと願う。



玉川大学出版部

▼西川潔・織田芳人著『ビレッジサイン―英国フォークロアのデザイン―』（四九〇〇円）ビレッジサインに施されたレリーフが教会や共有地の存在を、あるいは村民の暮らし振りを、言葉より鮮明に伝える。ビレッジサインには、英国らしい気品さえ漂っている。（読売新聞一月二五日付朝刊より）



▼久米康生著『和紙 多彩な用と美』（五四〇〇円）シーボルトらによって高く評価された和紙。ヨーロッパ各地の博物館・美術館・図書館には、江戸期・明治初期の日常生活を彩っていた貴重なコレクションが所蔵されていた。本書は美しさと汎用性を併せ持つ和紙の魅力と本質に迫る。

中央大学出版部

▼長谷川廣編著『日本型経営システムの構造転換』（五九〇〇円）

なぜ今また日本的（型）経営なのか、そのわけは、現代の企業経営をめぐる環境が大きく変わり、日本的（型）経営の見直しの再検討を迫られているからに他ならない。

すなわち、「国際化」の時代から「グローバル化」の時代に入ったといわれ、「大競争時代」ともいわれるような新時代をむかえて、日本の企業は、単にこれまでのような「モノづくり」に熱中しているだけではすまされない。いかに安く、いかに大量にモノをつくるかよりも、何をつくり、何をするか問題なのだといわれている。独創性や創造性が重視され、個性重視の能力開発が強く求められているのもそのためなのである。本書では、こうした時代背景のもとにおける日本企業の経営システムの全体像を究明するとともに、その再構築の実態と方向とを、環境保全、企業財務、持ち株会社の解禁、情報システム化の推進、などについて解明する。

東海大学出版会

▼『和州吉野郡群山記―その踏查路と生物相―』B5判 本体一〇〇〇円

御勢久右衛門編著 東謙吉・岩野和彦著 紀州藩の本草学者、畔田翠山による「和州吉野郡群山記」は江戸期吉野地方の動物相・植物相を知る貴重な記録である。

本書では「和州吉野郡群山記」の翻刻を掲載し、それに編著者らの踏查によって確定された踏查路・植物相・動物相を注として挿入、現代吉野の植物相・動物相と重ねあわせる。「和州吉野郡群山記」の植物相と動物相は主として漢字で記載され、当時の仮名和名・地方名も付記されているが、実地踏查によって確認されたものはつとめて現在の和名に変換・同定した。大和における翠山最初の著書「金嶽草木誌」についても同様に掲載した。畔田翠山の踏查路の大半はすでに消滅して村人の記憶からも薄れているが、可能な限り踏查路の復元を試み、「和州吉野郡群山記」の理解を助けるものとして踏查路全行図を付し、底本掲載の図約一五〇点も掲載した。一五〇年の時空を超えて吉野古道を現代によみがえらせる。

東京大学出版会

シリーズ「情報社会の文化」（青木保ほか編、全4巻）の刊行が開始された。

私たちを取り巻く文化を大きく変えてきた情報化の流れ。ポータルサービス化する社会では文化の複合が進み、現在では情報化は国境を越え、ナショナルな文化統合をゆるがしている。ネットワーク化された電子メディアの中には様々なヴァーチャル・ワールドが見え隠れし、私たちの現実感覚の根底を危うくさせるような犯罪も発生している。きわめて多様な文化変容を、情報化の進展がもたらしているのである。

それら具体的な現代の文化の変容の場面に、情報化とのかかわりを考えながら迫る本シリーズでは、人類学、社会学、芸術学、倫理学、宗教学等、各方面の気鋭の研究者が集い、共同研究や討議の成果をふまえ執筆している。

各巻はそれぞれ、青木保・梶原景昭編『1 情報化とアジア・イメージ』、内田隆三編『2 イメージのなかの社会』、嶋田厚・柏木博・吉見俊哉編『3 デザイン・テクノロジー・市場』、島蘭進・越智貢編『4 心情の変容』。

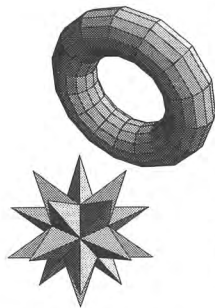
東京電機大学出版局

Mathematicaは数値計算、代数計算、サウンド処理等を実行する強力な数式処理ソフトである。簡単なコマンドで難解な数式を三次元グラフィックス表示したり、数値変化をアニメーションとして表現することが可能なため、初学者の理解を助け学習効果を上げることができる。三冊の関連新刊書を紹介する。

▼中村健蔵著『Mathematicaで絵を描こう』（三五〇〇円）Mathematicaを画像作成のツールとして使用。アーティストティックなアニメーション等を作成する。

▼小峯龍男著『Mathematicaによる材料力学』（一九〇〇円）Mathematicaで問題を解き材料力学の理解を助ける。

▼同右著『ファーストステップMathematica』（二〇〇〇円）Mathematicaの基本的な扱い方を初心者向けに解説。



『Mathematicaで絵を描こう』よりMathematicaによるグラフィックス例

東京農業大学出版会

▼『文明開化と造園』針ヶ谷鐘吉（本体一九〇五円）

平成二年に、同名で出版した本を、縮刷版でまとめたもの。文明開化というと明治維新により欧米文化が堰を切って流れ込んで来た時である。近代的工場の実現、鉄道の開通、蒸気船の運航、電信・郵便の開始、ガス灯の設置、洋服・洋食の奨励、洋風建築・散髪を採用等々。江戸時代の生活様式が、がらっと変わっていった。

それが、当然造園にも強い影響をおよぼしたことは明白である。例えば銀座煉瓦街の誕生。明治五年の大火によって全焼したこの一帯に、火に強い煉瓦造りの建築市街をつくった。この事業はイギリス人ウォートルスが設計、街路樹には、カエデ、サクラ、マツなどが使われ、純日本式街路樹の通りが出来上ったという。その他、アメリカ・セントラルパークというとても大きい大きさの公園を、どのような目で日本人が見たか。明治維新から百年以上経つと、「文明開化」という言葉の響きも薄れたが、当時の影響は、はかりしれないものがあった。

法政大学出版局

▼A・リード／平野秀秋・田中優子訳
『大航海時代の東南アジア』(全2巻)

アジアに関する名著がまた一つ翻訳され、日本の一般読者の目に触れることになった。喜ばしい限りである。……大略十五世紀から十七世紀の東南アジアを、「交易の時代」というコンセプトでとらえ、ヨーロッパ史の「大航海時代」に匹敵する、海を架け橋とする壮大な地域全体にわたる文化・歴史のドラマとして描き切る。……あのプロードル史学の東南アジアへの適用であるが、その試みは間違いなく成功裡に仕上げられている。

……欧米人によるアジア研究のぼう大な蓄積が、これまで日本の一般読者の手に必ずしも十分に届けられていたとは言えない。中には、たしかに欧米の基準に偏した視野のものも多いが、「アジア」のことはアジア人にかかわらない」という偏見を打破する上で、本書はまさに格好の事例となつていよう。訳者(田中)があとがきで言う通り、本書は我々日本人にとって「アジアの中で互いを発見する」ための本である。……

読売新聞・中西輝政氏評

放送大学教育振興会

▼これまで関東地域だけであった放送大学の電波の視聴地域が、平成十年一月二十一日から一挙に全国に広がった。通信衛生(CS)デジタル放送用のアンテナ等をセットすれば、北海道から沖縄まで全国のどこでも、自宅で放送授業が視聴できるようになる(パーフェクトV、テレビ二〇五チャンネル、ラジオ五〇〇チャンネル)。これで、放送大学設置構想以来の目標であった視聴可能地域の全国化が実現したこととなる。

▼全国放送の開始にともなつて、十月から全国で全科履修生を受け入れることを放送大学では検討している。それに備えて地域学習センターの整備や、全センターでの面接授業の開講、学習相談の充実などにも力を入れ、準備を行っている。

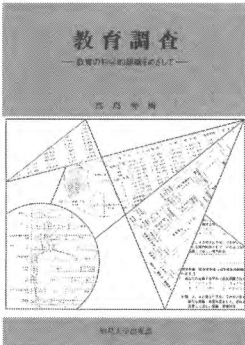
▼放送大学は放送教材と印刷教材とで授業を行う通信制大学であるが、その印刷教材の編集・発行が、わが放送大学教育振興会の大きな業務の一つである。平成十年の新聞は六十七点、放送大学の第一学期に開設される科目は三十四科目。

▼放送大学では平成九年度第一学期末までに卒業生累計が一万人を超えた。

明星大学出版部

高島秀樹著『教育調査―教育の科学的認識をめざして―』(三七〇〇円)

▼現代日本においては、教育の科学的な研究のための教育調査も、教育実践のための教育調査も数多く実施され、それらの成果は多くの事実を私たちに教えてくれている。しかし、教育の科学的研究の方法としての教育調査が、有効性を保つためには、その調査が正しい方法と技術に基づいて的確に行われていなければならない。本書は、I教育調査 II教育調査の諸技術 III教育調査の諸領域という内容からも分かるように、大学の学部段階でのテキストとして利用できるように必要最小限の内容を取り入れて作成されている。

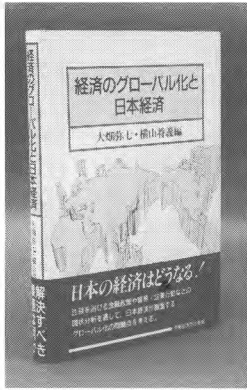


早稲田大学出版部

▼『シェイクスピア—この豊かな影法師』（大井邦雄、三三〇〇円）シェイクスピアをどう読むか。今を生きるシェイクスピアの発掘と発見をテーマに、四大悲劇の台詞の新解釈を試み、映画のなかに潜むシェイクスピアを探索する。

▼『世界システムの「ゆらぎ」の構造—EU・東アジア・世界経済』（田村正勝・白井陽一郎、四二〇〇円）自由貿易主義の功罪を多角的に検証し、個性豊かな地域同士の交流がもたらす柔軟な世界システムを提唱する。

▼『経済のグローバル化と日本経済』（大畑弥七・横山将義編、三三〇〇円）注目を浴びる金融政策や貿易、企業行動などの現状分析を通して、日本経済が直面するグローバル化の問題点を考える。



名古屋大学出版会

▼J・スチュアート／小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理—第1・第2編—』（二二〇〇円）『国富論』に先立ち、理論・政策・歴史の諸領域を統合した最初の経済学体系の全訳ついに完成。

▼A・O・ラブリジョイ／鈴木信雄他訳『人間本性考』（三三〇〇円）承認願望、競争心、高慢さといった観念の歴史を辿り、人間の情念と社会の秩序形成の問題を精緻明晰に考察した好著。

▼谷本雅之著『日本における在来的経済発展と織物業—市場形成と家族経済—』（六五〇〇円）在地商人の成長、小農家族の戦略、問屋制家内工業の展開を析出し、従来の工業化論に修正を迫る力作。

▼小林達也編『ガンマナイフ治療—症例を中心として—』（二二〇〇円）ガンマ線を使い開頭せずに脳動静脈奇形や腫瘍を治療する方法を、千例以上を手掛けた医師達が症例を中心にまとめた。

▼伊藤文雄編『クローズアップ臨床栄養学—四〇〇〇円』、飲食物中心の栄養学から、それを摂取する身体の側に視軸を移し、ホルモンの働きや細胞膜受容体の変化などを、遺伝子解析も含めて解説。

京都大学学術出版会

▼『地震と都市ライフライン』都市防災と環境に関する研究会編・六五〇〇円／日常生活を支え、災害発生時の救援・復旧の要となるライフラインそれ自体の耐震性と保守・復旧対策をどう作るか。阪神大震災による最新の知見をふまえ、巨大地震時代のライフライン建設に指針を示す。土木・建築関係者必携の理論書。

▼『暴力の文化人類学』田中雅一編著・六三一円／戦争、食人、生け贄……人類の歴史はまさに暴力とともにあつた。人類学は、暴力そのものに内在する問題にどのように取り組むことができるのか。本書は、とくに文化人類学を中心に学際的な展望を持って考察することにより、暴力論の新たな地平を切り開いていく。

▼『ヒュロン主義哲学の概要』（西洋古典叢書I—8）セクストス・エンペイリコス／金山弥平他訳・三八〇〇円／一五六二年、本書のラテン語訳の出版は、哲学史上、他に類を見ないほどの大反響をもたらした。その影響は、モンテーニュ、デカルト、ヒューム、カントなどに及び近世哲学の形成に大きく貢献した。ここに、古代懐疑主義哲学が全容を現わす。

大阪経済法科大学出版部

▼M・サイドマン著／向井喜典訳『労働に反抗する労働者』

世界恐慌と人民戦線で知られる一九三〇年代の世界史の諸経験を対象として、近年の日本や欧米で理論的・実証的に注目すべき代表的な著書があいついで公開されている。本書は、欧米における新しい研究動向を代表する国際的な第一級の研究成果のひとつである。「比較社会経済史」の視座から、人民戦線の期間のフランスとスペインのブルジョワジーと労働者階級との経済的・政治的な社会関係を実証的かつ国際的に比較する。従来のマルクス主義的歴史研究の方法と欧米諸国でのオーソドックスな社会運動史の研究方法を超克することをねらいとして、労働過程で疎外された労働者が人間性を回復する課題に向けて社会・労働運動の研究方法の開拓を試みている。さらに、パリとバルセロナという、フランスとスペインの重要な諸経験に対象を集約している研究方法も特徴的である。第一章〈第七章バルセロナにおけるスペイン革命 第八章〈第一章フランス人民戦線について論述している。

関西大学出版部

▼藤善真澄編著『浙江と日本』（二四〇〇円）稲作東伝、鑑真渡日の謎、唐詩ルート、呉越文化、入宋僧、江南の漆芸、李仁山種痘書、倭寇、十七・十八世紀の寧波船、漂着唐船萬勝號、西学東漸の道、留日浙江人夏丐尊、官費留日学生、傳雲竜の日本研究などが本書のキーワード。

▼藪田貫編著『寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料』（五〇〇〇円）唐船一艘ごとに資料収集をするという方針のもと、寧波船萬勝號の漂着始末日記や漂着顛末図譜などの応接記録、船主と儒者の筆談記録、静岡県内各地に散らばる漂着見聞記などを収め、ほかに詳細な解説と松浦章氏の「中国商船萬勝号の運営形態」も収録。▼鶴嶋雪嶺著『中国朝鮮族の研究』（四五〇〇円）中国朝鮮族を移住史、農業経営、抗日闘争、今日の延辺朝鮮族自治州などから全般的に解明。移住史では中国側の移住歓迎の諸要因、日本による中朝国境協定の締結、農業経営の発展が辺境の開発に貢献しながらも民族差別の要因になったこと、民族主義者の抗日闘争、文化大革命期の迫害など、新しい研究成果も発表。

九州大学出版会

▼小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のため』(B5判・三〇六頁・八〇〇〇円)。

本書は、地形・地質学、地理学、考古学、文献史学などの学際的研究グループが、歴史的都市を含む一つのまとまった地域について、自然的・歴史的環境の変遷を、数千年の長い期間にまたがって追求した研究実践例。日本生命財団出版助成図書。▼上里賢一編『校訂本 中山詩文集』(菊判・三七六頁・八〇〇〇円)。「中山詩文集」は琉球における最初の本格的漢詩文集である。一七二五年に初版、一八五六年に重刊本が出ている。現在流通しているテキストの中で保存状態の良い重刊本を底本に初版本の写本等と校合して、信頼できるテキストを作成する。付録として『皇清詩選』(中国で編纂された詩集)所収の琉球人の作品六九首を付す。日本生命財団出版助成図書。

▼前田良爾『ドイツ農民戦争史研究』(A5判・三九二頁・七五〇〇円)。本書は、諸学説の批判的検証と公刊・未公刊史料の詳細な分析に基づく新しい民衆社会史の視点からの総合的研究書である。

東北大学出版会

- ▼中田祐、藤村重文著『呼吸器外科学』（A4判・一五〇〇〇円）は、肺・気管支の解剖、生理、呼吸器外科の検査法と手術法、疾患の病態、診断法、治療法及び肺移植の最新成果をまとめている。
- ▼細谷昂著『現代と日本農村社会学』（A5判・五二六頁・五〇〇〇円）は、日本の社会と文化の根底にひそむものの変化を探り、昭和前期から現代までの歴史を生きぬいてきた家と村のとらえ直しを明らかにしている。
- ▼高橋滯子著『心の科学史—西洋心理学の源流と実験心理学の誕生』（B5判・二九七頁・五〇〇〇円）は、現代心理学を特色づけている方法論と認識論の歴史的な成立過程をヴァントに基づいて解明。
- ▼尾坂芳夫著『心の豊かさをつくる技術知』（A5判・二九一三頁）は、近代科学と技術の有効性と限界を多角的にとらえ、神学との関係にまで言及して人間のための自然科学を説明する。
- ▼足立達著『ミルクの文化誌』（予価三〇〇〇円）は、人類がミルクを入手して以来のミルクに関する文化の発展を検証したもの。

流通経済大学出版会

- ▼H・アームストロング&J・テイラー／流通経済大学教授坂下昇監訳『地域経済学と地域政策』A5判四〇六頁・四〇〇〇円。
- 本書は、本誌第三一号で近刊予定図書としてご紹介したが諸般の事情で発行が遅れた。しかし、いよいよ本年三月一日付で発行の運びとなったので改めてご紹介する。
- 内容は、地域経済学の基礎理論を懇切に説明したあと、イギリスおよびヨーロッパ連合の実例を豊富に引用しつつ地域経済分析や地域経済政策のわかり易い解説を展開しており、大学の教科書として最適のものであるとともに、一般の読者にも有用な万人向きの地域経済学テキストである。
- ▼流通経済大学教授吉田準三著『日本の会社制度発達史の研究』A5判三八五頁・三五〇〇円。
- 近年、バブル経済崩壊により、金融をはじめ証券、不動産など多くの業種で経営破綻が相次いでいるが、本書ではコーポレートガバナンス（企業統治）の視点からわが国の明治以降現在に至る会社制度の展開過程を回顧し、将来の会社制度の望ましいあり方を提示する。

大阪大学出版会

- ▼柏原士郎・上野 淳・森田孝夫 編著『阪神・淡路大震災における避難所の研究』B5・三四二頁・七〇〇〇円。
- 一九九五年一月十七日兵庫県南部地震発生。その直後から現地入りし、避難所と避難生活の実態を詳細に記録したフィールドワーク研究の成果。逃げずに済む安全で住みよいまちづくりのための基礎資料として地域防災計画に一石を投じる。
- 日本生命財団出版助成図書。
- ▼鬼原俊枝 著『幽微の探究—狩野探幽論』B5・函入り・一五〇〇〇円。
- 江戸狩野派を確立した巨匠という名声のゆえに、かえって探幽研究は敬遠され沈滞気味であった。近年、再評価の気運にあるが、その一翼をになう著者が新資料の発掘も含め、前半生の画歴を丹念に追い、その画風形成を明らかにする。
- 科研費研究成果公開促進費助成図書。
- ▼畑田耕一・宮西正宜 編『科学技術と人間のかかわり』四六・二二〇〇円。
- 執筆者・池内了・安齋育郎・奥 雅博・中村桂子・餌取章男・茅 陽一・児玉文雄・甲斐 學・島田 彌・松本 元・嶋 正利・水野博之

新刊案内 '98・1 / '98・3

■北海道大学図書刊行会

水鳥のための油汚染救護マニユアル

E・ウォラベン／黒沢信道・黒沢優子訳 一八〇〇円

ハイチ革命とフランス革命 浜 忠雄 六六〇〇円

年金保険の基本構造―アメリカ社会保障制度の展開と自由の理念― 菊池 馨実 八五〇〇円

産業医制度の研究 保原喜志夫編著 五〇〇〇円

非営利組織の経営―日本のボランティアー― 小島 廣光 四六〇〇円

両生類の発生生物学 片桐千明編著 八四〇〇円

地域づくり教育の誕生―北アイルランドの実践分析― 鈴木 敏正 六七〇〇円

基本法農政下の日本稲作―その計量経済学的研究― 近藤 巧 四八〇〇円

株式恐慌とアメリカ証券市場―両大戦間期の「バブル」の発生と崩壊― 小林 真之 七八〇〇円

土の自然史―食料・生命・環境― 佐久間敏雄・梅田安治編著 三〇〇〇円

■聖学院大学出版会

イギリス・デモクラシーの擁護者 A・D・リンゼイ 永岡薫編著 五二〇〇円

―その人―と思想― 三田村佳子 七六〇〇円

川口鑄物の技術と伝承

■慶應義塾大学出版会

現代日本人の政治意識 公平 慎策 二六〇〇円

福沢諭吉の横顔 中国革命と第三党 西川 俊作 二二〇〇円

Les animaux dans la littérature 周 偉 嘉 三二〇〇円

三田演説会と慶應義塾系演説会 原野昇／他 九一七五円

季節のオルゴール―中国随想集― 松崎 欣一 八〇〇〇円

フラット化組織の管理と心理 奥野信太郎 二三〇〇円

第一次世界大戦と日本海軍 横田 絵里 二八〇〇円

平間 洋一 四〇〇〇円

■産能大学出版部

不可能を可能にするイメージ・コントロール 保坂榮之介 一五〇〇円

衝撃の古代出雲 安本 美典 一八〇〇円

マーフィー運命の法則 J・マーフィー／加藤明訳 一六〇〇円

床暖房のある暮らし 沢田知子監修 一六〇〇円

情報処理入門 白旗修編著 二八〇〇円

人事アセスメントの科学 二村 英幸 二八〇〇円

「流通業」デジタル情報ネットワークワーキング 水尾順一編著 一八〇〇円

「新しい」人づきあいの心理学 安本 美典 一六〇〇円

潜在意識を「こう活用すれば」あなたの運命は自由自在 渡辺 弘毅 一五〇〇円

ガン死のすすめ 柴田 二郎 一五〇〇円

■専修大学出版局

学術とロマン 石巻専修大学開放センター編 一四〇〇円

今村力三郎訴訟記録 帝人事件(十一)

専修大学今村法律研究室編 四一七五円

■玉川大学出版部

日本国学監デイビッド・マレー―その生涯と業績―

吉家 定夫 四三〇〇円

アメリカ高等教育 試練の時代―一九九〇―二〇一〇年―

C・カー／喜多村和之監訳 四〇〇〇円

アメリカ高等教育の歴史と未来―二一世紀への展望―

C・カー／喜多村和之監訳 四五〇〇円

母のための人間学

ビレッジサイン―英国フォークロアのデザイン― 頼藤 和寛 二四〇〇円

西川潔・織田芳人 四九〇〇円

インサイド・ストーリー―宗教の再生―

P・ブロックルマン／小松加代子訳 四六〇〇円

和紙 多彩な用と美

久米 康生 五四〇〇円

アメリカ社会と高等教育

P・G・アルトバック他編／高橋靖直訳 五五〇〇円

美と芸術のプログラムード

利光 功 二八〇〇円

時事問題入門

日比野正明 一七〇〇円

教員採用の過去と未来

山崎 博敏 三九〇〇円

■中央大学出版部

ADRと民事訴訟

E・シャーマン／大村雅彦編訳 一三〇〇円

中国行政訴訟制度の特質

葉 陵 八三〇〇円

日本型経営システムの構造転換

長谷川 廣 五九〇〇円

娘と女の間―コレットにおける母娘関係と男女関係の交差―

小野ゆり子 一一五〇〇円

競争法の国際的調整と貿易問題

伊従 寛 二八〇〇円

Management Strategies of Multinational Corporations

in Asian Markets 高橋由明・他 四五〇〇円

日韓における立法の新展開

小島 武司 四三〇〇円

組織・企業犯罪を考える

渥美東洋編 三八〇〇円

■東海大学出版会

開発と環境の経済学―人間開発論の視点から―

鳥飼 行博 二二〇〇円

異端のインド

定方 晟 四〇〇〇円

偶然性と神話―後期シェリングの現実性の形而上学―

橋本 崇 五五〇〇円

和州吉野郡群山記―その踏查路と生物相―

御勢久右衛門編著 一〇〇〇〇円

エレクトロニクス発展のあゆみ―黎明期の東北帝国大学工学部電気

工学科―エレクトロニクス発展のあゆみ調査会編 五〇〇〇円

固体物性論の基礎

小泉義晴・高橋宣明 二二〇〇円

自然科学史入門

永井彰・上野信平 二五〇〇円

セメスター対応生物学入門

矢野 和成 二五〇〇円

セメスターのための電子物性とデバイス

白石 正 二八〇〇円

基礎線形代数

基礎数学研究会編 二〇〇〇円

基礎微分積分学

基礎数学研究会編 二四〇〇円

中国のチョウ海への向こうの兄弟たち―青山潤三 一六〇〇〇円

最新ごみ事情Q&A―ごみ行政マンへの一〇〇の質問―

寄本勝美監修／吉野敏行編 一八〇〇円

ピザンツ帝国史

尚樹啓太郎 一五〇〇円

砒素をめぐる環境問題―自然地質・人口地質の有害性と無害性―

湊秀雄監修／日本地質学会環境地質研究会委員会編 三〇〇〇円

■東京大学出版会

20世紀システム1 構想と形成

東京大学社会科学研究所編 三八〇〇円
 ヴィゴツキーの発達論―文化―歴史の理論の形成と展開―

中村 和夫 五二〇〇円
 日本語のかたち―対照言語学からのアプローチ―

山中 桂一 四八〇〇円
 性と身体の近世史
 倉地 克直 四二〇〇円

巨大地域開発の構想と帰結
 船橋晴俊・長谷川公一・飯島伸子編 八五〇〇円
 ―むつ小川原開発と核燃料サイクル施設―

アジアの地方制度
 森田 朗編 八五〇〇円
 醍醐 聰 三五〇〇円

乱流の数値流体力学―モデルと計算法―
 大宮司久明・三宅裕・吉澤徹編 二〇〇〇円
 テントウムシの自然史 佐々治寛之 四〇〇〇円

昭和篇96
 帝国議会貴族院委員会速記録 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

昭和篇132
 帝国議会衆議院委員会速記録 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

The Universe of English II
 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

東京大学教養学部英語部会編 一九〇〇円
 西山光一戦後日記―一九五二―一九七五年―

新編県一農民の軌跡 西田美昭・久保安夫編著 三八〇〇円
 近代中国とイギリス資本―一九世紀後半のジャーディン・

マゼンソン商会を中心に―
 石井摩耶子 六五〇〇円
 長谷部由起子 四二〇〇円

変革の中の民事裁判 藤田 久一 五六〇〇円
 国連法
 英米法研究文献目録―一九七六―一九九五年
 日米法学会編 二九〇〇円

偏微分方程式入門 基礎数学12 金子 晃 三四〇〇円

哺乳類の生物学5 生態 高槻 成紀 二六〇〇円
 日本被害津波総覧〔第2版〕 渡辺偉夫 一〇〇〇〇円
 明恵上人資料 第四 高山寺資料叢書18 高山寺資料叢書18 二〇〇〇円

高山寺典籍文書総合調査団編 二〇〇〇円
 帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇97 国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇133 国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

イメージのなかの社会 情報社会の文化2 内田隆三編 二五〇〇円

イラン近代の原像―英雄サーター・ハーンの革命― 八尾師 誠 三二〇〇円
 〈中東イスラム世界9〉

20世紀システム2 経済成長I―基軸― 東京大学社会科学研究所編 三八〇〇円

恋愛小説のレトリック―『ボヴァリー夫人』を読む 工藤 庸子 二六〇〇円

中国演劇史 田仲 一成 八四〇〇円

中世公家政権の研究 本郷 恵子 七四〇〇円

近世・近代の南山城―綿作から茶業へ― 石井寛治・林玲子編 七二〇〇円

史料 スルタンガリエフの夢と現実 山内昌之編訳 五八〇〇円
 現代社会心理学 末永俊郎・安藤清志編 三〇〇〇円

刑法総論講義〔第3版〕 前田 雅英 三六〇〇円
 現代ヨーロッパ法の展望 北村一郎編集代表 一五〇〇〇円

哺乳類の生物学3 生理 坪田 敏男 二六〇〇円
 写真でみる火山の自然史 町田洋・白尾元理 四五〇〇円
 概説 地球環境問題 阿部寛治編 二八〇〇円

Japanese Historians and the National Myths, 1600-1945
—The Age of the Gods and Emperor Jimmu—

新情報技術基礎 指導書

中村隆一他 四三〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録

昭和篇98

John S. Brownlee 八〇〇〇円

■法政大学出版局

医療化社会の文化誌—生き切ること・死に切ること—

新村 拓 三三〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録

昭和篇134

国立国会図書館所蔵 一三〇〇〇円

国立国会図書館所蔵 一七〇〇〇円

記号学の基礎理論

J・ディーリー／大熊昭信訳

新村 拓 三〇〇〇円

ナチズム下の子どもたち—家庭と学校の崩壊—

E・マン／田代尚弘訳

四宮 満 二二〇〇円

滅びのシンフォニー—トマス・マロリーの世界—

T・クランプ／高島直昭訳

四宮 満 二二〇〇円

数の人類学

N・マルカム／黒崎宏訳

宇佐美ミサ子 九〇〇〇円

ワイトゲンシュタインと宗教

N・マルカム／黒崎宏訳

宇佐美ミサ子 九〇〇〇円

近世助郷制の研究—西相模地域を中心に—

宇佐美ミサ子

宇佐美ミサ子 九〇〇〇円

中世瀬戸内海地域史の研究

山内 譲 七二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

山内 譲 七二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

山内 譲 七二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書

森 郁夫 一二二〇〇円

エルサレム―記憶の戦場― A・エロン／村田靖子訳 四二〇〇円
野鍛冶(のかじ)〈ものゝ人間の文化史85〉

ドイツ人の家屋

朝岡 康二 二七〇〇円
坂井 洲二 三六〇〇円

聖なる快樂―性、神話、身体、政治―

七六〇〇円

R・アイスラー／浅野敏夫訳
子どもの人権と裁判―子どもの権利条約に即して―

永井憲一編著 二八〇〇円

バルトークの室内楽曲

二八〇〇円

J・カールパーティ／江原望・伊東信宏訳
人間の生の遺産 E・シャルガフ／清水健次・他訳

六六〇〇円
三八〇〇円

哲学〈49号〉

日本哲学会編 一八〇〇円

スポーツ社会学研究〈第6巻〉
日本スポーツ社会学会編・発行

一九〇〇円

■放送大学教育振興会

世界の教育〔新訂〕
教育の人間学〔改訂版〕
近代の教育思想〔改訂版〕

宮澤康人・小林雅之 二〇〇〇円
和田 修二 一六〇〇円
宮澤 康人 二〇〇〇円

教育社会学〔改訂版〕
幼児教育の社会学
心理学史〔新訂〕
フロンティア人間科学

天野郁夫・藤田英典・荻谷剛彦 二二〇〇円
萩原 元昭 二二〇〇円
大山正・上村保子 二四〇〇円
中島義明・太田裕彦 二四〇〇円
小島秀夫・三宅和夫 二〇〇〇円

発達心理学
社会心理学―アジア的視点から―
児童心理学

山口 勸 二〇〇〇円
無藤 隆 二〇〇〇円
竹中 星郎 二〇〇〇円

老年期の心理と病理
言語発達心理学
児童の臨床心理

内田 伸子 三〇〇〇円
上野 一彦 二〇〇〇円
繁榎 算男 二四〇〇円

心理測定法〔新版〕

二四〇〇円

人生の哲学 国語学概論 白藤禮幸・杉浦克己 二八〇〇円
世界の文化と思想 大隅 和雄 二〇〇〇円

近世の日本文学 原尻 英樹 二六〇〇円

清少納言と紫式部 長島弘明・清登典子 二八〇〇円
徒然草の遠景 鈴木日出男 二六〇〇円

イギリス文学〔改訂版〕 島内 裕子 二六〇〇円
ドイツ文学 高松 雄一 二四〇〇円

フランスの文学 神品 芳夫 二六〇〇円
日本の中世 渡邊守章・塩川徹也 四四〇〇円

日本の近世 五味 文彦 二六〇〇円
中国の歴史と社会 大口勇次郎・高木昭作・杉森哲也 二〇〇〇円

生活学入門―日常生活の探求―大久保孝治・嶋崎尚子 二四〇〇円
生活文化史〔改訂版〕 平井 聖 二〇〇〇円

消費者問題の展開と対応 小木 紀之 二六〇〇円
洗濯と洗剤の科学 阿部 幸子 二二〇〇円

調理とおいしさの科学 島田淳子・今井悦子 二四〇〇円
住まい学入門 本間 博文 二八〇〇円

日本における集合住宅計画の変遷 高田 光雄 二二〇〇円
脳と生体統御〔新訂〕 仙波 純一 二八〇〇円

日本人人口論―高齢化と人口問題― 清水 浩昭 二四〇〇円
子ども家庭福祉論 高橋 重宏 四八〇〇円

現代の貧困と公的扶助 杉村 宏 二六〇〇円
民法〔新版〕 奥田 昌道 二〇〇〇円

家族法〔新版〕 泉 久雄 二〇〇〇円
行政の法システム入門 阿部 泰隆 二六〇〇円

法からみる国際関係 筒井若水・道垣内正人 二二〇〇円
経済社会の現代 坂井 素思 二二〇〇円

経営学入門 赤岡 功 二〇〇〇円

税務会計

生産の設備化と経営

逸脱の社会学〔改訂版〕

コミュニケーション論

大地と人間―食・農・環境の未来―

微積分入門I

対称性の数学

基礎化学〔三訂版〕

エネルギーと熱

物質の科学・量子化学

物質の科学・有機化合物

物質の科学・分析

基礎生物学

細胞生物学〔新版〕

日本の自然

英語II(98)

ドイツ語I(98)

ドイツ語II(98)

ドイツ語IV(98)

フランス語III(98)

フランス語IV(98)

中国語IV(98)

スペイン語II(98)

武田 隆二 二八〇〇円

熊谷 智徳 四二〇〇円

清永賢二・岩永雅也 二四〇〇円

倉沢 進 二〇〇〇円

祖田 修 二四〇〇円

斎藤 正彦 二四〇〇円

高橋 礼司 二六〇〇円

平川暁子・市村禎二郎 二四〇〇円

阿部龍蔵・堂寺知成 二六〇〇円

朽津耕三・濱田嘉昭 三八〇〇円

徳丸 克己 三六〇〇円

一國 雅巳 二四〇〇円

中澤透・山田晃弘 二四〇〇円

石川春律・藤原敬己 三二〇〇円

濱田隆士・中村和郎 三四〇〇円

霜崎 實 二四〇〇円

新田 春夫 二二〇〇円

新田 春夫 二六〇〇円

幸田 薫 二二〇〇円

三浦 信孝 二〇〇〇円

保苅 瑞穂 二四〇〇円

木村 英樹 二六〇〇円

山口 恙正 二二〇〇円

■早稲田大学出版部

経済のグローバル化と日本経済

大畑弥七・横山将義編 三五〇〇円

シェイクスピア―この豊かな影法師― 大井 邦雄 三六〇〇円

世界システムの「ゆらぎ」の構造―E.U・東アジア・世界経済― 田村正勝・白井陽一郎 四二〇〇円

ラグビーの作戦と戦術〔新装版〕

日比野弘・松元秀雄・山本巧 二六〇〇円

シリーズ高齢社会とエイジング(全8巻) 第2回配本/第3巻 尾澤達也編 二六〇〇円

エイジングの化粧品

シリーズ比較家族(第1期全10巻) 第10回配本/第10巻

家族のオートノミー 丸山茂・橋川俊忠・小馬徹編 三四〇〇円

シリーズ社会経済史 第7回配本/第7巻

中世イギリス農奴制の衰退 R・ヒルトン/松村平一郎訳 一八〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇(全18巻) 第17回配本/第15巻

遠西独度涅鳥草木譜 IV 杉本つとむ編 三二〇〇円

■名古屋大学出版会

人間本性考 A・O・ラブリジョイ/鈴木信雄他訳 三八〇〇円

日本における在来的経済発展と織物業―市場形成と家族経済― 谷本 雅之 六五〇〇円

ガンマナイフ治療―症例を中心として―小林達也編 二二〇〇円

クローズアップ臨床栄養学 伊藤文雄編 四〇〇〇円

経済の原理―第1・第2編― J・スチュアート/小林昇監訳・竹本洋他訳 二二〇〇円

■京都大学学術出版会

ピュロン主義哲学の概要(西洋古典叢書I-18)

セクストス・エンペイリコス/金山弥平・万里子訳 三八〇〇円

■明星大学出版部
教育調査―教育の科学的認識をめざして―

高島 秀樹 三七〇〇円

自省録〈西洋古典叢書I-9〉

マルクス・アウレリウス／水地宗明訳 三二〇〇円

地震と都市ライフラインシステムの診断と復旧―

都市防災と環境に関する研究会編 六五〇〇円

暴力の文化人類学

環太平洋諸国の興亡と相互依存―京大環太平洋モデルの
田中雅一編著 六三一一円

構造とシミュレーション―

Urbanisation from Below 大西 宏 五六三二円

Black-Hole Accretion Disks

加藤正二・峯重慎・福江純 七〇八七円

■大阪経済法科大学出版部

在日朝鮮人の歴史と展望―近現代の朝鮮と日本の関係史―

文道平編著 三二〇〇円

■関西大学出版部

浙江と日本

寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料

中国朝鮮族の研究

九州大学出版会

ロード・バイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼』第二編・注解

田吹長彦編 七五〇〇円

災害都市の研究―島原市と普賢岳―

沖繩の疾病像を探る―新しい病理学の試み―

鈴木 広編 六六〇〇円

ドイツ農民戦争史研究

私という記号―ドイツ文学における自我の構造―

岩政輝男・町並陸生編 七五〇〇円

前間 良爾 七五〇〇円

岡野 進編 四五〇〇円

ヘーゲルの近代自然法学批判 永尾 孝雄 三四〇〇円

現代健康学

山田裕章監修／九州大学健康科学センター編 二六〇〇円

国際化と文化の多様性〈九州産業大学公開講座12〉 二〇〇〇円

福岡平野の古環境と遺跡立地―環境としての遺跡との共存の

ために―小林茂・磯 望・佐伯弘次・高倉洋彰編 八〇〇〇円

校訂本 中山詩文集 上里賢一編 八〇〇〇円

■東北大学出版会

呼吸器外科学 仲田祐・藤村重文 一五〇〇〇円

現代と日本農村社会学 細谷 昂 五〇〇〇円

心の科学史―西洋心理学の源流と実験心理学の誕生―

高橋 滯子 五〇〇〇円

心の豊かさをつくる技術知 尾坂 芳夫 二九一三円

ミルクの文化誌 足立 達 三〇〇〇円

■流通経済大学出版会

交通学―三〇年の系譜と展望―二一世紀に学ぶ人のために―

角本 良平 五〇〇〇円

地域経済学と地域政策

H・アームストロング、J・テイラー／坂下昇監訳 四〇〇〇円

■大阪大学出版会

阪神・淡路大震災における避難所の研究

柏原士郎・上野淳・森田孝夫編著 七〇〇〇円

幽微の探究―狩野探幽論―

科学技術と人間のかかわり 畑田耕一・宮西正宜編 二二〇〇円

鬼原 俊枝 一五〇〇〇円

科学技術と人間のかかわり 畑田耕一・宮西正宜編 二二〇〇円

科学技術と人間のかかわり 畑田耕一・宮西正宜編 二二〇〇円

科学技術と人間のかかわり 畑田耕一・宮西正宜編 二二〇〇円

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935 FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8730 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7—3—1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2—14—1 TEL. 03-5228-6271 FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1—名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-0853 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121 FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2—1—1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市中畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX. 06-877-1614

大学出版(第37号) '98春 平成10年4月10日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956

頒布価格100円 共共